

序

毎年、就職の時節になると、少しでも有利な条件で職にありつこうとする応募側の売り込みや、短い面接時間でその資質を見究めようとする求人側の対応などの記事が目につくようになる。企業にとっては、どのようにして有為な人材を得るかが問題であるが、就職希望者の職業に対する期待はさまざまである。たとえば口を糊するための就職では、その職種を選択する余裕はなかろう。一方、どのような条件であろうと、是非この職業を選びたいといった場合もあろう。どちらも就職に対する熱意は変らぬが、企業が何れを選ぶかは有為の解釈による。

一般に、同じ職業という言葉でも、その意識の差によって表現が変わる。英語では職業を問われると、その答え方には *occupation*, *vocation*, *profession* があると言う。*occupation* がいかにも業務といった感じであるのに対し、*vocation* は天職などと訳され、使命的な職業を指す。それに対し *profession* は、もとは法律家、医者、聖職者を意味したというのが今は学問的素養の必要な知的職業を言うことと辞書にある。よく使われる用語のプロというのは *professional* で、それで飯を食える専門家、玄人のことを言う。

サラリーマンが「仕事だから仕方がない」などと言うのは職業を *occupation* ととらえている場合であり、身を賭しても事に当れるのなら *vocation* としての理解によるのであろう。少なくとも、そこには仕事に対する打ちこみ方の差がある。さらに同じ身の入れようでも、*profession* の場合は些かクールな趣きがある。たとえば幾ら貧しても筆を捨てない画家には *vocation* があると言えるが悲壮感が漂う。しかし *profession* には自他共に認める専門的知識に支えられた委ね得る安心感がある。

研究とは、分らない事を分るようにする知的な創造行為であり、その結果には大方の信頼が得られねばならぬ。したがって、研究には鋭い感受性と磨き抜かれた技術が必要であり、研究者がプロでなければならぬ所以である。

1983年10月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 太田利彦